

全入時代における大学英語教育

小田井 勝 彦

1. はじめに

大学名にこだわらなければ、誰もが大学に入学できる全入時代が到来した。多くの大学が定員割れを起こしている他、それ以外の大学でも入試における合格倍率は下がっている。また AO 入試や推薦入試の制度が拡充されており、受験勉強をほとんどしなくても、さらには高校の学習内容の習得が不十分なままでも、大学に入学できるようになったのである。大学生の学力は年々低下しているのが感じられ、新入生に対してリメディアル授業を実施する大学も増加している。

グローバル社会を迎え、英語の重要性が以前にも増して説かれるようになってきているが、他教科同様、英語の学力も低下の一途を辿っている。本稿では、大学生の英語力の現状を検証し、全入時代となった現在の大学英語教育のあり方を考察していきたい。

2. 学生の誤答から

以下は、筆者が担当している大学1年生の読解を主眼にした授業のテストで実際にあった学生の誤答である。

(A) The leaves of the trees turn red in the fall.

- (1) そのツリーが去るのは赤くなってから。
- (2) 木が赤くなるのは秋です。

(B) Nothing is more important in my life than reading.

- (1) 私の人生において読書は欠かせないものである。
 (2) 人生を読むことは重要ではない。

まず、(A)－(1)を見ていただきたい。“tree”の訳語として「ツリー」としか出てこないものか、“leaf (leaves)”, “fall”の意味も知らないのかと頭を抱えたくなるであろう。他の3つの解答と比べて、一番救いがたい解答であると言えよう。しかしながら、(A)－(1)の解答は、“The leaves of the trees”, “turn red”で区切っている。どこまでが主部であり、どこからが述部であるのかは捉えられており、「葉」という名詞の意味を知らないために、動詞の“leave”を動名詞のような訳し方をしているものと考えられる。(「ってから」と余計な語尾をつけてしまったのが欠点ではあるが。)

それに対して、(A)－(2)の解答は(A)－(1)よりも正解には近い。“leaf (leaves)”の意味がわからないのは(A)－(1)と同じだが、“tree”と“fall”に適切な訳語が与えられているためである。しかしながら、主部と述部の関係で言うと、“The leaves of the trees turn red”までを主部とし、“in the fall”を述語として訳出しており、主語と述語の関係は捉えられていない。語彙力の点では(1)より優れていても、文法構造の理解の点では劣っているといえることができる。

(B)はどうであろうか。どちらが正解に近いのか甲乙決めたいが、語彙力の観点では、(2)の勝ちである。(2)は“nothing”が否定語であることや“important”の意味は理解している。しかしながら、(1)は“in my life”“than reading”という意味のまとまりがしっかり捉えられており、“Nothing”や“important”の意味さえ知っているなら、「私の人生において読書は最も重要です。」と正しく理解できるのに対し、(2)は決してこれ以上正解に近づく可能性がなく、語彙力のみで強引に意味を作り出した解答であると言える。

これらの誤答は、全入時代における学力低下の証拠であるといえる。(A)、(B)それぞれは、すべて高校までで学習するであろう語彙、文法事項である。しかし、受験勉強という形で詰め込み作業を十分にしなかった結果、(A)(B)それぞれの(1)に見られるように基本的な語彙も習得しないまま、大学生にな

ってしまったと考えられる。

(A)(B)それぞれの(2)のような誤答が生じるのも、ひとつには全入時代の影響である。受験をしないので、正確に英文の構造や文法を理解する努力なしに入学してしまったのであろう。また受験をした場合でも、センター試験を導入する大学が増えたり、一般入試においても選択式の問題ばかりで、記述問題を課さない大学が増えたため、「木が赤くなるのは秋です。」という理解のままでも、なんとかやり過ごすことができたのではないかと考えられるからである。

しかしながら、(A)(B)それぞれの(2)は別の問題も提起しているように思える。それは、中学、高校における英語教育である。受験に対する自己学習の部分が取り除かれたことによって、中学、高校における英語教育がそのまま露呈してしまっていると考えられるのである。

2002年度(高校はその翌年)より実施された学習指導要領により、コミュニケーション重視の方向性が以前よりさらに強く打ち出された。その当時筆者は、高校に勤務していて、改訂の前後で高校1年生の「英語Ⅰ」を担当していた。同じ出版社による同じタイトルの教科書を使用したのであるが、改訂前は散文が主体であったが、改訂後は手紙や会話の形になるなど口語体の文章が多用され、全体の文章量の激減に驚いた記憶がある。そして文法訳読式の従来の授業から、教科書の題材を使つてのコミュニケーション活動を中心とした授業への転換を余儀なくされたのである。

コミュニケーション重視の方向性は、決して間違つたものではない。「細かい文法事項はしっかり身につけ、訳すことはできるが、使うことはできない」という結果を生み出してきた従来の英語教育のままで良いはずはない。主体的に英語を運用できるようにすることは必要である。しかしながら、コミュニケーション重視ということが、文法、読解の軽視につながっているのではないだろうか。軽視までいかなくとも、授業時間数は増えていないのに、コミュニケーション活動を多く盛り込もうとした結果、文法や読解に割り当てる時間が減ってしまい、生徒が十分に習得できないままになってしまつて

いる可能性がある。また、文法用語をなるべく使用せずに説明しようという動きもあり、体系的に文法が教えられていないのではないかという危惧がある。例えば、次の学生の誤答を見ていただきたい。

(C) Seeing him makes her smile again.

- (1) 彼は彼女が作る笑顔を見ていた。
- (2) 笑顔の彼女を彼は見ていた。

“again”の意味を知らないこと、使役動詞の“make”が理解できていないことは百歩譲ってよしとしよう。“him”は目的格であり、“her”は所有格か目的格であることがしっかりと身につけていれば、「彼は」「彼女が」のように主格として訳すことはなく、また「彼女が作る」「彼は見ていた」のように直前にある動詞を“her”, “him”の述語として訳すこともないはずである。さらには“her smile”のように後ろの名詞が代名詞を修飾することもありえない。せいぜい、「彼を見ることは彼女の微笑を作る」くらいの誤訳になるはずである。このように基本的な文法力が欠如している学生が増加しつつある。

また、文法をしっかりと踏まえた読解をしていないことも指摘できよう。近年、「和訳先渡し授業」なるものが中学、高校の英語教育で提唱された。和訳を授業前に渡して、文章の意味は生徒に授業前に確認させることで、コミュニケーション活動に多くの時間を割くことができるというものである。そのような授業では、生徒自らが英文法の知識を活かして主体的に文章の意味を捉える訓練が欠如していると言えよう。コミュニケーション重視の名のもとに、読解の軽視が行なわれているといっても過言ではないのではないだろうか。

もう1つ、学生の誤答を提示する。

(D) The best thing about picking up clothes from different countries is it helps to put an individual stamp on your style.

- (1) 最もよい方法はあなたの個性を助長させるような様々な国々の服を買い集めることだ。

この学生は、「to put」以下はいい加減であるのだが、(A)(B)(C)の学生よりははるかに語彙力があり、(A)(B)(C)の問題であれば難なく正解を出せる英語力であろう。しかしながら、この文の構造の大枠である SVC 構造がしっかり捉えられていないために、無理やり「助長させるような様々な国々」と文中にない意味を付加し、前置詞+動名詞の部分の部分を述語にしているのだと考えられる。高校の授業で、文法的に分析した英文解釈が身につけていないことによって、学生は語彙の意味だけから無理やり意味を推測することになっているのではないだろうか。

「英語を英語のまま理解する」、「英語を英語の語順のまま理解する」といったことは、英語力向上の過程において大切なことであると考えられる。しかしながら、日本語と英語では文法構造が大きく違う言語である。それをしっかりと意識させることが、初期の学習段階ではやはり必要なのではないだろうか。それをしないまま、次のステップへと進んでいることが、逆に基礎力を欠く結果となっているのではないかと考える。以前は「訳すことはできるが、使うことはできない」状態であったが、今は「訳すこともできないし、使うこともできない」状態へと向かっているといえるのではないだろうか。

もちろん、大学生全員が上記のような誤答をするのではないことはいまでもない。翻訳家顔負けの見事な訳文を解答する学生も存在する。しかしながら、実感として、以前は単語や熟語がわからないという間違え方だったのに対し、基本的な文法を理解していなかったり、文法構造を理解していない間違え方をしたりする学生が増加しているように感じられるのである。

その原因は、これまで考察してきたように、中学・高校の授業が変容しつつあり、文法軽視で、生徒自らが英文の意味を正確に理解できないままであり、そして、全入時代になったことで受験勉強という形で積極的に理解しようという努力すらしないまま入学しているためである。2013年からは、高校では英

語の授業をすべて英語で授業を行うことが決定されたが、ますます基本的な部分が抜け落ちてしまうのではないかという危惧すらある。

このように基礎力を欠く学生が増加しつつあるなか、大学英語教育はいかにあるべきなのだろうか。それを考察する前に、多くの大学で行われている英語教育の現状を見直してみたい。

3. 大学英語教育の現状

中学、高校の英語教育が変化しているのと同様に、大学における英語教育も大きく変わりつつある。ひとつはカリキュラム面であり、もうひとつは内容面である。

まず、カリキュラム面であるが、これが一番大きな問題である。以前の大学では、1、2年生は教養教育、3、4年生は専門教育と分かれていたのだが、専門教育を前倒しする傾向が強まっている。その結果、大きく影響を受けているのが外国語教育である。以前は2ヶ国語を履修することが必修であったが、まず第2外国語が必修から選択の授業となり、そして英語の履修単位も削減する傾向がある。

その傾向は、全入時代になったことで、さらに強まっている。それはひとつには、受験生が減ったことによる収入減により、少人数で行わなければならない外国語教育が経費削減の対象になっているからである。また、以前から単位を落とす学生が多いのが外国語であることから、留年者数を減らすためでもあるらしい。グローバル化社会となり、英語力の必要性が以前よりもさらに強く求められている時代であるにも関わらず、残念ながら大学の英語教育は縮小傾向となっているといえよう。

また、内容面でも変容しつつある。それは、より実用的な英語能力を身に付けて欲しいという社会からの要請であり、全入時代において学生を確保するために他大学との差別化をつけるための大学改革の一環でもある。そして主に、大学英語教育の向かっている方向は、口語英語の重視と TOEIC®の重視である。しかしながら、それらは多くの問題を抱えているように筆者には

思えるのである。

ひとつめは、中学、高校と同様に、コミュニケーション重視の方向である。他の技能よりもスピーキングに重きが置かれ、ネイティブによる英会話の授業が、英語教育のカリキュラムの中心に置かれている大学がある。中には、英語教育すべてを英会話学校に丸投げしている大学やコンピュータを使用したの自己学習に任せている大学まで存在する。また、単なる英会話ではなく、英語でのプレゼンテーションをカリキュラムに取り入れる大学も増えてきている。

コミュニケーション重視という方向性自体は、極めて正しいものであると思われる。読めるというだけでなく、口語能力が身につけていた方が良く、英語で立派にプレゼンテーションできることは、社会において求められている能力である。しかしながら、さきほど2.で考察した学生の英語力を考えると、必ずしも良いとばかりは言い切れないのである。

全入時代の影響によって、学生は語彙力も基礎力も欠いている。そのような状態で、いきなり英会話の授業をさせても結果は見えている。語学の授業は、そのターゲットとなる言語で教える直接教授法の方が、効果があるとされているが、大学の授業は基本的には週1回90分のみであり、それ以外は全く英語には触れないという状況では、それほど大きな進歩があるとは思えない。当然、基礎力を欠いた学生が対象であれば、高度のディベートやディスカッションなどに発展するはずもなく、中学校で行われるような日常会話のレベルに終始してしまうのである。また基礎力がないので、ネイティブの教員が学生の理解を十分にするために、日本語を使用しないといけないという事態まで生じている。

これでは本末転倒であることは言うまでもない。ネイティブの教員が日本語を差し挟みながら説明をするよりも、日本人の教員が日本語で授業をした方が圧倒的に情報量を与えられるし、説明が行き渡る分、日常会話レベル以上のことが可能であると考えられるからである。

また、英語でのプレゼンテーションを学ぶ授業がトレンドであり、筆者も

毎年担当している。学生の英語力がしっかりしていれば、かなりよい成果をあげることができるものであると思うが、実情はそうではない。基礎力が欠けているために、英文を作成するののままならないし、辞書の発音記号も読めないで発音も滅茶苦茶で、日本語だか英語だかわからないひどい発表を聞かされるか、教員がすべてに手を加えた原稿を使い、発音もひとつひとつ指導するという誰の発表だかわからないことをするのが落ちである。このような授業では、学生の英語力向上に何の貢献もしないであろう。和文英訳できちんと文を作る訓練をした方が、基本的な力を欠いた学生の英語力に貢献することは言うまでもない。

内容面でのもうひとつの傾向は、TOEIC[®]の重視である。社会に出て必要とされる実用英語を身につける、就職活動などで役立つ、という理由で、大きく取り上げられている。科目名そのものに TOEIC[®]が入った授業を展開している大学も多いし、読解とか表現というタイトルであるが、TOEIC[®]の教材をテキストに選んでいる授業も多い。また、内容は普通の読解のテキストであるが、章末の練習問題は TOEIC[®]の問題形式にしていることを大きく謳ったテキストが増えてきている。

何度も繰り返しになるが、方向性自体は決して間違っただけのものではない。社会に出て、ビジネスにおいて必要とされる実用英語を学生に身につけさせようという意図に決して反対ではない。しかし、これまで考察してきたような学生の実情と照らし合わせてみると、問題があるように思えるのである。

その問題点は、TOEIC[®]テストの結果そのものが語っているように思える。TOEIC[®]の公式ホームページに掲載された「TOEIC[®]テスト DATA & ANALYSIS 2008」によると、TOEIC[®]テストの大学生の平均点数は 430 点で、その内訳は、日本人が一般的に苦手であるという認識と異なってリスニングの方が高く、242 点であり、リーディングは 188 点である。この点数は、どのようなレベルなのであろうか。TOEIC[®]テストのスコアレポートと一緒に送られてくる“Score Descriptor Table”の Reading Section の記述を引用してみる。大学生の平均点は、最低レベルの 220～5 点の欄である。

一般的に以下の長所が認められます。

- ・あまり広い範囲を読む必要がないとき、ならびに文章中に使われているのと同じ表現が問題に使用されているときは、事実に基づく情報に関する問題に正答できる。
- ・簡単な語彙、よく使用される句が理解できる。
- ・あまり広い範囲を読む必要がないときは、よく使用される、規則に基づいた文法構造が理解できる。

一般的に以下の短所が認められます。

- ・文章中の情報について、推測ができない。
- ・事実に基づく情報の、言い換えが理解できない。解答するとき、問題に使用されているのと同じ単語や句を文章の中から探すことに頼る。
- ・一つの文中の情報さえ、関連付けることができないことが多い。
- ・限られた語彙しか理解できない。
- ・文法以外に難しい言語要素(難しい語彙が使用されている、情報を関連付ける必要がある)がある場合は、簡単な文法構造も理解できない。

(Educational Testing Service, 2008)

これらの記述からわかることは、語彙力も弱く、知らない単語などがあると簡単な文法構造すらきちんと捉えられない。(2.で検証した学生の誤答に通じるものがあるであろう。)そして、何が原因で何が結果なのかなど、複数の文を関連付けて、文章の内容を理解することができないということである。書いてあることが、そのままの形で設問されたときしか解答できず、英語の力というよりは、情報検索能力のみで解答できているに過ぎないかもしれない。

例えば、“When do the leaves of the tree turn red?”という質問文で、文中から“The leaves of the trees turn red in the fall.”の文を探し出し、“fall”そのものないし、「秋」を意味しているものを選択肢から選ばせるのである。しかしなが

ら、学生のこの英文に対する理解は、「そのツリーが去るのは赤くなってから。」とか「木が赤くなるのは秋です。」といったものでしかないのである。

TOEIC[®]の問題を教材にしている授業をすべて否定するつもりはない。しかしながら、TOEIC[®]でより高い得点を獲得することを主眼にした授業は、学生の英語力を無視して、解法のテクニックを教えることに偏りがちである。例えば、Listening の写真描写問題なら、“-ing”のところを集中して聞きましょうとか、Reading の読解問題なら、まず問題を読んでから情報を探しましょうなどといった教え方である。学生は個々の文の理解もままならず、文章の脈絡も把握できない状態であるのに、スキミングやスキヤニングといった読解の技術を教えることになるのである。

テクニックを教えることである程度は点数も上がるであろうが、正確に文や文章の意味を捉えられない限り、高得点を目指すことは不可能である。そして、スキミングやスキヤニングといったテクニックの部分は、自己学習でも身につけることは可能であるのに対し、正確に読解をすることはなかなか自己学習では習得しにくいものではないだろうか。したがって、テクニックの習得を主体にした授業ではその場しのぎの得点アップには役立つかもしれないが、将来的なことを考えると学生のためにはなっていない。テクニックを教える授業は学生に受けがよく、満足度も高い。しかしながら、満足度と英語力向上は必ずしも比例しているわけではないのである。そして、文法規則にしたがって正確に読むことをせず、知っている単語からのみ意味を類推するような癖を学生に付けてしまったとしたら、むしろ学生にとってマイナスであると言ってもよいかもしれない。

これまで考察してきたように、口語英語の重視、TOEIC[®]を教材とした実用英語の重視は、方向性としては決して間違ったものではない。しっかりとした効果を挙げている大学や授業も存在しているはずである。学生の基礎力がしっかりしていれば、効果の上がるものであろう。しかしながら、全入時代に突入し、学生の基礎力がおぼつかないものとなってきた。そのような学生が対象では、それらの授業は効果がないのである。英語の履修単位が減らさ

れている中、そのような授業しか受講しないとすれば、学生の英語力は壊滅的なままになってしまいうだろうと考えられる。

4. 提言

これまで、学生の英語力がどのように欠けてきているか、そして現在行われている大学英語教育が学生の実力とあわなくなっているかを考察してきた。最後に、これまで述べてきたことを踏まえて、全入時代における大学英語教育のあり方を考えたい。

時代と逆行しているという批判があることは百も承知しているが、筆者が主張したいことは、読解の授業を英語カリキュラムの基本に据えることである。それも、スキミングやスキニングのようなテクニックを教える授業ではなく、きちんと文法構造を踏まえた精読をすることである。

文字を見て正確に読むことができないのに、なぜそれを聞いて理解することができるであろうか。また、自分が理解できない文を、自分で書いたり、しゃべったりすることができるはずはない。読んで理解することができるのはじめて、聞く、書く、話すことができるのである。日本語に訳すという作業は、自分の言葉で英語を正確に理解する作業である。以前は「訳すことはできるが、使うことはできない」状態であった。つまり、正確に文法構造を理解することはできていたのである。ただ、それがアウトプットに繋がらなかっただけである。今は「訳すこともできないので、使うこともできない」状態に陥っているのである。英語を正確に理解する作業が、第一に必要なことである。

さきほども述べたが、英語の履修単位は縮小傾向にある。削減されて残った限られた授業を英会話などに充ててしまったら、学生には何も残らないまま、卒業させてしまうことになる。しかし、読解の授業をカリキュラムの中心とすることで、英語を正確に理解するという基本的な力を与えることが可能なのではないかと思う。基礎力さえ身につければ、あとは自主学習にまかせてもよいのではないだろうか。

もちろん欲を言えば、「訳すこともできるし、使うこともできる」という状態にすることである。一年生でしっかりと読解力を身につけさせうえて、2年生以上で口語英語、実用英語を身につけるカリキュラム配置をすれば、「使うこともできる」学生を育成できるはずである。せめて以前のように1、2年生で週2回ずつ8単位必修とすべきである。

また、読解を重視するという主張は、単に学生の学力低下に応じたものではない。学生の中には、将来大学院に進学して研究職につく学生もいるだろうし、大学で学んだ知識を活かした専門職につく学生もいるはずである。以前ならば、基本的な学力が備わっていたので、自分で専門的な語彙等を習得すれば、英語で書かれた論文や研究書を読みこなせるようになっていた。しかしながら、現在の学生は読解力が不足している。大学の英語の授業できちんと読解力を身につけさせなければ、どれだけ専門領域に優れていても、世界中の最先端の研究を取り入れることはできない。そして、読むこともできないのに、発信することもできないであろう。日本の科学技術振興に悪影響を及ぼしかねない問題である。英語の授業を「コミュニケーション能力」という形で、専門教育と切り離して考えるのではなく、専門教育に必要な基礎力としてもういちど考え直す必要があるのではないだろうか。

全入時代は、マイナス面ばかりが取り上げられがちであるが、より多くの人が高等教育を受けることができ、科学技術振興のチャンスでもある。自ら研究書や論文を読みこなし、主体的に問題解決をすることができる専門性を備えた人材を輩出することで、大学は社会に貢献することができるのではないだろうか。英語教育もその一助となるべきである。

現在の大学英語教育は、性急に結果を出そうとして、空回りしているように思える。理想や方向性は決して間違ったものではないが、学生の学力と乖離しているために、逆に基礎力を欠いたまま社会に送り出しているという危惧がある。時代に逆行すると言われるかもしれないが、基本的な読解力を習得させることを主体とし、社会に出て、あるいは大学院に入ってから、必要とされる力を自学でも習得できるようにすることをまず考えることが先決で

ある。さもないければ、社会に出ても基礎力を欠いているために将来的にも英語が使えないままの人材となり、科学技術の発展も期待できないものになってしまうのである。

全入時代の今こそ、決して結果を急ぐことなく、学生の学力としっかり向き合い、最低限必要なことを積み重ねていくことを大事にすべきである。「学問に王道なし」という言葉があるが、英語に関しても一朝一夕で習得できるものではない。大学を卒業し、社会に出た後での生涯学習の基盤となるべきものを目指していくべきではないかと筆者は考えるのである。

参考文献・サイト

“Score Descriptor Table”(Tokyo, Educational Testing Service, 2008)

<http://www.toeic.or.jp/toeic/pdf/data/DAA2008.pdf>